

令和元年度（2019年度）実施報告書（総説）

本年度は、「島根半島・宍道湖中海ジオパーク地域の史料からみえる景観と人々の産業、生活、文化に関する研究」と題して、鳥谷智文、杉谷真理子、矢野千紘の3名により、古代～現代にかけての史料の分析を行ってきた。その進捗状況は、2020年1月24日、「ジオパークについての研究進捗検討報告会」と称して、鳥谷から研究報告（別紙参照）、杉谷、矢野からは進捗状況の報告があり、これまでの研究成果及び今後の研究方針を確認した。

本年度は研究の初年度ということもあり、各自、先行研究の収集及び分析を主として行った。時代順にその研究状況を見てみると、古代においては、矢野が出雲地域を研究する上で必須の『出雲国風土記』の分析を行い、同史料において、磐坂日子命が「絵に描いた鞆（とも）」と語った恵曇の「国形（地形）」が、いかなる視点から、どの範囲を指して見立てたものであったかについて、文献史学、考古学の観点から調査・検討した。風土記を始め古事記や日本書紀などの上代文献の用例から、「国形」は従来説にあった海からの視点ではなく高地から俯瞰した視点であること、さらに遺跡の分布状況と恵杼毛社の位置関係から、現恵曇神社付近から国見をした可能性が高いことを指摘することができた。また「国形」が指し示す範囲については、恵曇の陂に比定される現：恵曇の低地部分がかつては潟湖であったことに注目した。柳田国男氏を始め、森浩一氏ら考古学者も指摘したように、古来日本海側には円形・楕円形の潟が多く、港湾として利用され、潟湖を核として遺跡が集中しており繁栄がしのばれる。恵曇の陂辺縁に位置する稗田遺跡から船具を含む木製品が出土している状況等から、「絵に描いた鞆」のような恵曇の「国形」とは、磐坂日子命が鎮座した恵曇神社から、円形の潟湖を内包した恵曇の陂を俯瞰した範囲を指し示していたのではないかと推論するところまで検討した。

時代が下り、近世期の史料を担当した鳥谷は、松江城下で商売を営む町人についてその経営の一端を商品とともに示した。例えば、モノづくりや生活に欠かせない薪炭林の流通、松江では現在でも特産品であり、その当時需要の高かったと考えられる酒造業、また、酒どころ越前や大坂（灘など）からの酒の購入・販売、中国山地の代表的な工業製品であった和鉄の流通、そして、和鉄の流通に伴い、松江で加工された水産加工物（「大形野焼き」など）の中山間地への流通など、多種多様であった。

また、松江城下の町人たちは、幕末から明治初年の激動期、未曾有の経営危機に陥っていく。町人の経営難にあたっては、他の松江町人からの救済のみならず、当時の松江藩最大の鉄師（たたら製鉄業経営者）田部家による経営たて直し策が展開していき、相互扶助的なあり方で、経営の存続を模索し、逞しく生きていったことを示した。このような松江の町人や産業経営者の活力が、ジオパーク地域の発展を支えていったと考えられる。

現代においては、杉谷がウェブサイトを対象として島根半島・宍道湖中海ジオパークに関する「情報」の現状を分析し、今後に向けた提案を行っている。ウェブサイトはジオパークの概要、ジオサイト紹介、学習、アクセス方法などの情報で構成されているが、各セクションの内容において個別的な記述が目立ちジオパーク上の生態系や人間の暮らしなどの関係性が伝わりづらく、改善について言及している。また、ジオツーリズムを重視し、観光地である宍道湖周辺や松江城、出雲大社などもルートに加えたモデルコースの提示なども提言している。

このように、一定の成果をあげることができたと考えているが、研究期間が短かったこともあり、当初の研究計画にあった聞き取り調査による分析などはできなかった。また、全ての時代を網羅しているわけではなく、限られた時代で分析し、その特徴を分析する段階で留

まっている。今後、本研究を進めるにあたり、更なる地道な調査、分析が必要であり、その成果を積み重ねていくことにより、当該地域におけるより深い情報を提供することができると考えている。

各人による研究成果の詳細については、後述の実施報告書（各論）を参照されたい。また、本年度の業績についても同時に記載している。但し業績については、ジオパークに関連するものだけでなく、もっと大きな範囲での研究業績も含め記載している。参考にしていただければ幸いである。ジオパークの今後の発展に期待するものである。

1. 研究進捗状況

『出雲国風土記』秋鹿郡恵曇郷（現：松江市鹿島町、以下『風土記』）については、自然や地形、開発、神話などの豊富な記述により、自然景観の変遷を知ることのできる数少ない事例として、これまで多分野からの研究が進められてきた（『出雲国風土記の研究Ⅰ～秋鹿郡恵曇郷調査報告書～』、島根県古代文化センター、1997. 3、以後『報告書』と称す）。本年度はそのうち、『風土記』において「鞆（とも）」に見立てられた恵曇の地形がどこを指すのかを、文献史料学、考古学の観点から調査・検討した。

恵曇の郷名の由来について、『風土記』では次のように語られる。

恵曇の郷。郡家の東北九里卅歩なり。須作能乎の命の御子、磐坂日子の命、国巡行り坐しし時に、此処に至り坐して詔りたまひしく、「此処は、国稚く美好しくあり。国形絵鞆のごとき哉。吾が宮は、是の処に造り事へよ」とのりたまひき。故れ、恵伴と云ふ。

神龜三年、字を恵曇と改む。 （植垣節也『風土記』新編日本古典文学全集5、小学館、1997）

（注）*磐坂日子命…他に見えない。後出の恵杼毛社の祭神。

*国形…地形。地勢。

*鞆…弓を射る際に左手の臂に着ける籠手。（『時代別国語大辞典上代編』）



鞆図_正倉院御物図



巴形土器_赤妻古墳出土

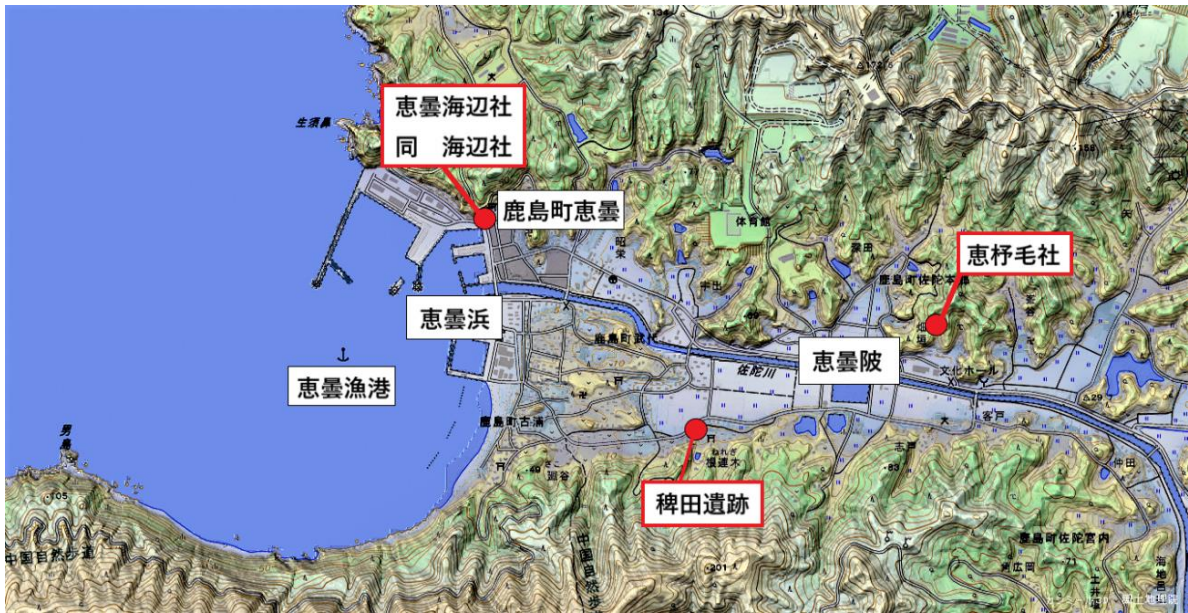


勾玉_相模国新磯村出土 （東京国立博物館画像検索）

この「国形、絵鞆のごとき哉」について、先行研究を整理すると、恵曇の郷全体が「鞆絵（絵に描いた鞆）＝巴」形であったとする説（（加藤義成『出雲国風土記参究』至文堂、1957. 10）や、C字形に湾曲した恵曇の海岸地形（恵曇の浜）を指すとする説（関和彦『出雲国風土記註論』明石書店、2006. 8））が有り、関氏の説が広く受け入れられているようである。しかし、恵曇の浜の内陸部にあった恵曇の陂（つつみ）（現：鹿島町佐陀本郷に比定）の低地一帯は、「内湾」→「潟」→「池」→「湿地または田圃」の時代を経て現在に至っていることが明らかになっており（高安克己「恵曇陂の古環境を復元する」（『報告書』））、風土記の時代と現在とは恵曇の景観にかなりの相違があったことを考慮する必要がある。

恵曇の陂は『風土記』で次のように語られる。

恵曇の陂。周り六里なり。鴛鴦・鳧・鴨・鮒あり。四辺に葦・蔣・菅生ふ。養老元年より以往は、荷葉、自然に叢れ生え、太多かりき。二年以降、自然に亡失せ、都べて莖なし。俗人云ひしく、その底に陶器・甌・甗等の類多くありといひき。古より時々人溺れ死にき。深き浅きを知らず。



『解説出雲国風土記』（島根県古代文化センター編、今井出版、2014. 3）を元に作成

前後の川や池の簡潔な記述とは一線を画する、詳細で神秘的な叙述である。高安氏の調査によると、恵曇の陂が「潟」から「池」に変わったのは約 3400 年前（縄文時代晩期）で、風土記時代にあたる古墳時代後期から奈良時代にかけては、堤防の築造など人為的な作用が原因と考えられる水面の上昇（水深は2～2.5メートル）がみられ、水面はハスやヒシなどで覆われていたとあり、『風土記』の記述と一致する。池の底に土器類が多いのは、かつてここで水神への祭祀が行われた痕跡とみられるが（加藤『参究』、荻原千鶴『出雲風土記全訳注』講談社学術文庫、1999.6）、考古学の立場では、縄文時代から歴史時代にかけては潟湖地形が海上交通の要衝港として選ばれていたことが指摘されており（森浩一「潟と港を発掘する」『日本の古代3 海をこえての交流』中央公論社、1986）、恵曇の陂も「潟の時代」（縄文時代後期）には港として大陸や日本海側の地域と海上を通じた交流を行っていた可能性が高い。恵曇の陂の縁辺に位置する稗田遺跡（弥生時代中期～古墳時代前期）からは船具を含む大量の木製品が出土している。これは、「潟」が「池」となってからも人々が恵曇の陂を積極的に利用していたことを物語る。『風土記』に「大風が吹くと砂が雪のように降り、桑や麻を覆ってしまう」「浜の西は岸壁が切り立ってけわしく、風が静かでも往来の舟を停泊させるところがない」と記された恵曇の浜～古浦にかけて湾曲した海岸線よりもむしろ、波も穏やかな恵曇の陂の方がかつて港として栄え、堤防が築かれて池となつてから古代人にとっての生活や信仰の中心地となっていた可能性を指摘することができる。

さらに、磐坂日子命の発言内容を吟味すると、「①此処は、国稚く美好しくあり」の「国稚く」は、風土記時代の恵曇の陂の脆弱な湿地の様子が伺えるし、「美好しく」は既述のとおりかつては一面に蓮が群生していた様を思い浮かべることができる。「②国形」については広義に地形と解されるが、『風土記』内の用例は他に、島根郡方結郷の地名伝承に一例みられる。

方結の郷。郡家の正東廿里八十歩なり。須佐袁の命の御子、国忍別の命、詔りたまひしく、「吾が敷き坐す地は、国形宜し」とのりたまひき。故れ、方結と云ふ。

『風土記』以外では『豊後国風土記』日田郡条に、鏡坂の地名伝承として景行天皇が坂の上から「国形」を見渡して、鏡の面に似ていると言ったとあるほか、「逸文豊前国風土記」には気長足姫尊が鏡山からはるかに「国形」を視察して祈った話があり、『播磨国風土記』飾磨郡には丘上に立って「地（くに）形」を視察したことから大立丘と名付けたとある。以上の用例から、「国形」は俯瞰して地形・国状を広く眺める際に用いられた言葉であると考えられるため、恵曇郷条の「国形」が恵曇の浜の海岸線というごく一部を指すとする関氏の指摘や、関氏に従って「画鞞」は海から見た恵曇の海岸線の地形を指すとする森田氏の指摘（森田喜久男「秋鹿郡恵曇関係史料の整理－歴史景観復元のために 3 同時代資料（古代文献）からのアプローチ」『報告書』）は、「国形」の指す範囲や視点としてはいささか不調和である。加藤氏の恵曇の郷全体が巴形・曲玉形であるとする説の方が「国形」の語感に合致するが、恵曇の陂の景観の変遷や人々の地形利用、信仰の様相などを考慮すると、その主眼は地形の外郭というよりもむしろ恵曇の郷が恵曇の陂を内に抱え込んだ輪状の形状にあり、鞞の腕に巻き付ける部分の輪状の形になぞらえられたのではないかと推測することができる。あるいは鞞の内部の空洞部分を指し、弓が鞞に当たった際に発せられる「鞞音」が万葉歌でも人々に賞美されたことから、鞞と言えば「内部が空洞の形状をしたもの」という意識が強かったのかもしれない。また、「③吾が宮は、是の処に造り事へよ」の部分は、磐坂日子命が恵杼毛社に鎮座する縁起を語ったもので、恵杼毛社は恵曇の浜にある恵曇海辺社ではなく、恵曇の陂を見下ろす内陸部の現：恵曇神社に比定されている。これにより、「是の処」とは恵曇の陂の辺縁を指した言葉だったことが分かる。

以上のように、本年度は先行研究の整理を中心としつつ考古学的知見や『風土記』の表現にも着目した調査を行うことによって、「鞞」に見立てられた恵曇の「国形」が、恵曇の海岸線ではなく、恵曇の陂を中心とした輪状の形状を指している可能性について指摘することができた。以上の内容を、2020年古事記学会4月例会にて発表する予定である。

2. 業績

○その他：

・山村桃子、矢野千紘：『古事記』検討会（島根県立大学 3 号館 2 階古典文学研究室）、2019.12.19

1. 研究進捗状況

城下町松江における人々については、渡辺浩一氏が富裕町人や様々な生業について示し、末次本町に拠点をおき活動した御用商人瀧川家や、苧町の小豆澤家の活動を詳細に分析された（城下町松江と在方町、松江市史通史編3 近世I第3章所収、松江市、2019.3）。

しかし、その後、史料の新たな分析により他の商人の性格も少しずつ明らかになってきた。天神町の山根屋雄右衛門は、松江城下の町屋で利用する薪炭や、人參方、釜甌方に代表される藩営工場で利用する薪炭を調達する役割を担っている。また、堅町の綿屋（後に乃木綿屋、以後乃木綿屋と称す）林左衛門は、酒造業を生業としており、魚町の松江綿屋忠四郎は、鉄師（たたら製鉄業経営者）田部家の鉄宿（田部家生産鉄の流通・販売業務）を生業としていたことがわかった。同じく魚町の長岡屋は、鉄師ト藏家の生産鉄を取り扱うとともに、松江特産の魚類や水産加工品（焼海老、「あご蒲鉾」（「大形野やき」）など）をト藏家へ送っている。また、前述の瀧川家は、享保18年（1733）、他国産の酒の仕入れ、販売を松江藩から任せられ、越前産や大坂産の酒を仕入れていた。また、同家は、文政期には「寒造り」の酒も造っている。

このように、本年度は松江に拠点をおく町人について、具体例を集め、多くの商品を仕入れ、販売するという活動をみることができた。また、松江を拠点として広範囲に物が流通していることも想定できた。

また、乃木綿屋林左衛門家が経営危機に陥った時、松江藩最大の鉄師（たたら製鉄業経営者）田部家が、手代を派遣し、経営のたて直しに着手している。また、田部家の和鉄流通の拠点であった松江綿屋忠四郎家の経営が傾いた時は、乃木綿屋林左衛門が自己の所有物である家屋敷などを負債返済の担保として差し出すなど、身を挺して救済に乗り出している。このように、経営の持続については、その家のみならず、他家による救済が行われることで倒産を免れており、経営者同士の相互扶助的な動きがみられ、現在の経営の特徴と比較検討すると興味深いのではと考えている。

2. 業績

○著書：

- ・小林准士、沢山美果子、多久田友秀、仲野義文、鳥谷智文他：松江市史通史編4 近世2、松江市、2020.3 刊行予定

○論文・研究ノート等：

- ・鳥谷智文：田部家の手船「鐵泉丸」（研究ノート）、鉄の歴史村会報第18号、pp. 4-8、2019.11
- ・鳥谷智文：明治中～後期における家嶋家生産鉄の出荷先及び出荷状況（2019年度社会経済史学会中国四国部会島根大会レポート）、社会経済史学会中国四国部会会報第57号、pp. 2-3、2020.2
- ・鳥谷智文：五人組規約・矯風規約にみえる人々の暮らし—出雲地域と石見地域山間部の比較検討一、菅谷たたら山内総合文化調査報告書、雲南市教育委員会、2020.3 刊行予定

○学会発表・講演等：

- ・鳥谷智文：五人組規約・矯風規約にみえる人々の暮らし、菅谷たたら山内総合文化調査報

告書検討会、(公財)鉄の歴史村地域振興事業団・雲南市教育委員会(吉田健康福祉センター)、2019.10.11

- ・鳥谷智文:明治中～後期における家嶋家生産鉄の出荷先及び出荷状況、社会経済史学会中国四国部会2019年度大会、社会経済史学会中国四国部会(島根県労働会館4階401室)、2019.11.30
- ・鳥谷智文:18世紀中頃における母里藩領の鉄流通と安来港の鉄問屋について、たたら研究会令和元年度鹿児島大会、たたら研究会(鹿児島県立埋蔵文化財センター研修室(鹿児島県文化振興財団上野原縄文の森内))、2019.12.7
- ・鳥谷智文:「鉄炮板鉄」の生産—櫻井家における特殊技術の保持—、日本技術史教育学会2019年度全国大会(福井・鯖江)、日本技術史教育学会(福井工業高等専門学校図書館)、2019.12.14
- ・鳥谷智文:松江城下の町人—豎町・灘町・魚町の町人について—、ジオパークについての研究進捗検討報告会(仮称)(松江工業高等専門学校332教員室)、2020.1.24
- ・鳥谷智文:たたら製鉄と人々—史料からみた日南町域の様相—、伯耆国たたら顕彰会(日南町総合文化センター2階多目的研修室)、2020.2.15

○その他:

- ・新聞記事:明珍家の歴史と挑戦紹介 日南でたたらフォーラム、日本海新聞2020年(令和2年)2月16日20面記事
- ・コメント:引野道生:「たたら」で雲南に活力を、週刊山陰経済ウイークリー2156号、pp.2-6、2019.2.18
- ・協力:令和元年度「地域活動体験学習」『たたら』の研究 たたらをめぐる3つの視点からの考察、くにびき学園第29期社会文化科、シマネスクくにびき学園(島根県社会福祉協議会)、2020.2

1. 研究進捗状況

島根半島・宍道湖中海ジオパークは、この地域における大地の変動とそれによって生まれた出雲国風土記の記述と重ね合わせて巡ることができるユニークなジオパークである。ジオパーク内のジオサイトを地図上でみると海沿いに位置しているものも多く、海食洞・海食崖や波食棚などのインパクトのある地形が観察できる。また地質や地形を舞台として、あるいは利用して、人々が生活を営んできた様子をうかがい知ることができる点もこのジオパークの魅力である。この67ヶ所あるジオサイトは自然の中で形成されたものが大半を占めるものの、「玉造温泉」、「来待石の石切り場」、「松江城とその石垣」、「湯の川温泉」、「青石畳通りと森山石」などでは、人間が関わることによって形作られ特有の景観を形成しているといえる。大地を学び地域文化を享受するなかで、またSNSが発達した現代において、これらは視覚的な刺激となって訪問者に強く作用するはずである。

上記のことをふまえ、本年度はウェブサイトを対象として島根半島・宍道湖中海ジオパークに関する「情報」の現状を考察し、今後に向けた提案を行いたい。ジオパークは各々ウェブサイトを開設しており、これはジオパークの情報を提供する媒体の中でもアクセスしやすく幅広い情報を公開しているものでもある。多くの訪問者はまずこれを参考にすることが想定されることより考察の対象とした。ただし、ジオパーク自体の認知度等に関しては、日本のジオパークの課題でもあり議論が広範となることからこれについてはここでの議論を避ける。本研究では、島根半島・宍道湖中海ジオパークのウェブサイトを開覧し、他のジオパーク（世界ジオパークおよび日本ジオパーク）との比較、またジオパーク関連の書籍を参考にウェブサイトから見える本ジオパークの現状について考察する手法を取った。

まず、ウェブサイトの構成はジオパークの概要、ジオサイト紹介、学習、アクセス方法を含み日本における他のジオパークウェブサイトと同様の形態をとっている。しかし、各セクションの内容においては他ジオパークのウェブサイトと比較して、個別的な記述が目立ちジオパーク上の生態系や人間の暮らしなどの関係性が伝わりづらい。例えば、「ジオの恵みと暮らし」では築地松や湿地、宍道湖のしじみについて紹介しているが、他のセクションでは触れられている箇所がほとんどなく地域理解に結びつきづらい。各セクションで完結せず、ウェブサイト全体を通して一貫するストーリー構成・展開であることが望ましい。

また各セクションに関しては、掲載内容の深淺の差があると感じる。大地の「保全」とともに「教育への活用」という点において、学習に関する事項は重要である。本ジオパークの「ジオ学習」のセクションは、地質およびジオサイトに関して細部にわたるまで解説があり相当な厚みを持っている。一方で、小中学生向けとされながらも専門用語が羅列される個所が見受けられ、学習材料とするならば学習段階をふまえた方がより利用されやすくなることを考える。地図やモデル図などを添えて理解を助けるとともに、見出しやリンクの張り方を簡潔にして利用しやすく整えること、加えてこのジオパークを理解するにあたり重要な情報を精査することも必要である。さらに、この地域における各年代の住民の学びにどのように関与し「ジオパーク」を根付かせていくかも今後の課題であろう。

そして最後に、ジオツーリズムの実施についてである。これは今回の考察の中で最も本ジオパークの課題の核に迫るものと考えられる。ジオツーリズムとは、「地球科学的観点から地球

のダイナミズムやメカニズム、地球と生命との相互関係について景観を読み解きながらたどる観光形態の1つ」(新名、2017)とされる。もとよりジオパークは「大地の遺産を活用して地域経済を豊かにし、豊かになった地域自らがその経済力で地域の遺産を保全し持続的に活用していく仕組み」(世界のジオパーク編集委員会・日本ジオパークネットワーク JGN、2011)と説明され、その役割として大地(ジオ遺産)の保全、教育の普及と活用、ジオツーリズムを通しての持続可能な開発が求められてきた。新名(2017)によれば、2011年に採択されたアロウカ宣言において、ジオパークはツーリズムの振興へ舵切りを行ったという。そして現に、各ジオパークにおいてジオツーリズムを意識したウェブサイトが作成されている。ジオパーク運営にあたり、地域内外に対してどのような学習・アクティビティがあるかアピールすることが必須となってくる。そしてその際、ウェブサイトはジオパークの魅力を発信する役割を担っている。しかし、本ジオパークにおいてはジオツーリズムを実施するにあたって、モデルコースの提示やジオサイト、ジオポイント間の移動手段などははっきりと示されておらず不十分という印象を受ける。また地形によっては実際に見に行くことが難しい場所もあり、これをジオツーリズムの中にどのような形で組み込むか検討する余地がある。さらに実際にジオツーリズムの行程を組もうとした際に、ウェブサイト上のガイド団体の紹介だけでは、土地勘のない人にとってはどの範囲までがガイドの対象なのかもわかりにくい。加えて、ジオパーク内での各団体の連携も重要であろう。既に観光地としての土台を築いている宍道湖周辺や松江城、出雲大社などもルートに加えながら、ジオパーク内でテーマを持ったモデルコースの提示なども可能であると考えられる。

参考文献：

1. 遠藤英樹・寺岡伸悟・堀野正人 編『観光メディア論』、ナカニシヤ出版、2017
2. 菊池俊夫・有馬貴之 編『よくわかる観光学2 自然ツーリズム学』、朝倉書店、2017
3. 河本大地「世界ジオパーク・日本ジオパークのウェブサイトにおける地図情報発信の特徴」、地図、日本地図学会、49巻3号、2011
4. 世界のジオパーク編集委員会・日本ジオパークネットワーク JGN『世界のジオパーク』、オーム社、2010
5. 野村律夫「風土記時代の大陸移動説：出雲国風土記にみる地球観」、学術の動向、日本学術協力財団、20巻10号、2015
6. 松江市史編集委員会『松江市史 通史編3 近世I』、今井印刷株式会社、2019

参考 URL (主たるもの)：

1. 国立大学法人島根大学ジオパークプロジェクトセンター<http://kunibiki.noomise.com/> (最終閲覧日 2020.3.5)
2. 島根半島・宍道湖中海ジオパーク <https://www.kunibiki-geopark.jp/> (最終閲覧日 2020.3.4)
3. 日本ジオパークネットワーク <https://geopark.jp/> (最終閲覧日 2020.3.4)

2. 業績

○学会発表・講演等：

- ・Mariko Sugitani 「A Study on the Formation of Landscapes and Resident Consciousness

in Japanese Castle Towns: A Case Study of Kitahoricho in Matsue City」、EUROGEO
2019 Slovenia、2019.8.29-31

- 杉谷真理子「城下町における住宅景観：景観形成とまちづくりの視点から」、中四国都市
学会、2019.10.26-27